

## 経営学を教える

森川英正

経営学を教える大学の教師になって38年になる。法政大学経営学部に26年、横浜国立大学経営学部に5年、慶應義塾大学ビジネススクールに6年、そして本学に1年というわけである。

この38年間、慶應時代を除いて、私は、学部学生に「経営学を教えること」の意味がわからずに、悩み続けて来たと言ってよい。考えても考えても答を得られないまま、今日にいたったと言ってよい。その私が、4月から本学の2年生に「経営学」を教える。何たるめぐり合わせであろうかと、思わざるを得ない。

慶應では何も悩むことはなかった。社会人大学院だからである。30歳前後の企業体験を積んだ会社員を教えるのである。教育方法も、理論や公式を教師が一方向的に教えるのではなく、企業経営の実際の出来事をケースにして読ませた上で、それにもとづいて質疑、討論を行う。学生は、そこで学び取ったアイデアや知識を会社に持ち帰って活用することができる。大変実践的である。

経営学を学びたいという会社員に経営学を教えるのであるから、教師と学生との間に意識のズレは何もない。それどころか、会社員である学生に教え、学生から会社の現状を生きた知識として学ぶ中で、教師は自らの知的資産を大きくふやすことができる。この上なくしあわせである。

ところが、学部学生の場合、そうはいかない。会社で働いたこともないし、会社は何が行われているところかもよく知らない。もちろん、銀行に会社のカネを借りに行って頭を下げたこともないし、作業現場で作業員から苦情を言われて処理に困ったこともない。会社の経営はどうあるべきか、どうしたら会社経営はうまく行くかなど、考えたこともなければ、こればかりの興味もない。そういう学生に経営学を教えるのである。何のために、こういうことをしなければならぬか？

法政でも、横浜国大でも、一年生で経営学は必修科目とされていた。私は、幸いなことに、どちらの大学でも一年生に経営学を教える立場になかった。しかし、高校を卒業したばかりの年齢層に経営学を教えるということが不思議でならず、その意義がよくつかめなかった。それで、担当教員に何をどう教えているのか質問してみた。

驚くことばかりであった。経営学の教科書を最初から順々に教えている先生がいた。市場と組織、経営戦略、損益分岐点といった項目が並んでいる。これを高校を卒業したばかりの学生に教えて、わからせることができるのだろうか。バーナードやサイモンの学説を教えているという先生がいた。バーナードの学説なんて、現在の私でも十分に理解し切っていない。それ

を新生に教えてどうしようというのだろうか。

私は、ある時、教授会で発言した。大学の新生には、大学は何のために存在するか、大学で何を学び、そのためにどんな本を読んだらいいか、世界の歴史と日本の歴史、現代社会の問題点、資本主義経済のしくみと発達史、そういった基礎的な教養知識をまず教えるべきで、経営学などはその先の先でいいのではないかと。経営学を教えている先生にどなられた。ドイツやアメリカの大学でも経営学を教えている。お前が知らないだけだ。

ドイツやアメリカでも一年生から必修で経営学を教えているのかどうか問題なのである。私が留学帰りの友人から聞いたところによると、欧米の大学で学部学生に教えている経営学(と日本の経営学者が名づけているもの)は、ビジネス・エコノミクスとでもいうべき内容で、いわゆるミクロ経済学に近いものらしい。経営管理の理論や技法を学部でも教えていると自信をもって話してくれた友人はいなかった。

日本で最初に経営学部を設置した大学は、昭和24年の神戸大学である。後世の経営学部の隆盛や経営学ブームから見ると、先見の明があったということになる。しかし、経営学という学問の市民権も確立していなかった当時、経営学を学部の学生に教えることの意義をどれだけマジメに神戸大学経営学部の教授たちは考えていたのかと問いかけたくなる。昭和31年に経営学部を発足させた明治大学、34年の法政大学でも同様である。

何か、経営学という新しい学問を教えたくて教えたくてしょうがない先生たちが先にいて、それに大学の財政事情や大学進学率を向上させたい文部省の意向が結びついて、経営学部が設立され、学部学生が経営学を学ばされる結果になったのではないかという気がしてならない。しかも、高校を卒業したばかりの一年生から、必修科目として。

生産者志向の強さというのは、日本の経済システム全般の話であるだけでなく、大学の話でもあるのである。教師の関心や都合が先にあって、その結果、学部やカリキュラムができて、学生はそれを受動的に学ばされるというわけである。

しかし、このように日本中いたるところに経営学部(あるいはそれに相当する学部)が設立され、必修科目として経営学が置かれ、低学年からそれを学ぶことを義務づけられている現状において、私ひとりがブーブー言ってもしかたない話である。ましてや、私は、四月から2年生に「経営学」を教えなければならない。疑問や不満は後回しにして、経営学に対する関心も熱意も持っていないそうもない学部学生(本学に限らない)、しかも、低学年の学生に、どうやって「経営学」を、それも彼らの興味をかき立てながら教えるのかについて、考えなければならない。

幸い、私の担当する「経営学」は「経営者の役割」がテーマである。少しは工夫のしようがありそうな気がする。

といて、経営者とは何か? 経営者の機能は何か? 経営者と株主(資本家)との関係は? 経営者と従業員の関係は? などなどの正攻法で授業をしても、学生には面白くも何ともないであろう。

私は、企業の経営者を企業のリーダーと通俗に解釈するところから始めたいと思う。授業の前半で、どんな組織であれ、組織のリーダーが組織に成功を収めさせるためには、しかも、そ

の成功を一時のものに終わらせないためには、どのような資格を身につけ、どのような役割を果たさなければならないか、を語ろうと思う。小テーマとしては、情報、決断、長期の方針(戦略)、指揮命令系統、協力者……等を選ぼう。事例としては、戦国時代の武将、第二次大戦や湾岸戦争、政党、プロ野球……学生が興味を持つような話題を提供しよう。

後半で、企業のリーダー、つまり経営者について語るつもりである。そのために、後半の冒頭で、軍隊とか、政党とか、プロ野球チームとかいった組織と比較して、企業とはどのような特性を備えた組織であるかをていねいに説明したい。「企業とは何か？」をしっかりと理解してもらいたい。

その後で、企業のリーダー、つまり経営者が、企業を成功させるために、しかも成功し続けさせるために、どのような資格を備え、どのような役割を果たしたらよいかを、これまた、できるだけ豊富な具体例を引きながら、話していくことにしようと思う。

私の試みがどこまで成功するか、今の所わからない。学生諸君から「何だつまらない」と批判されるかもしれない。しかし、私の工夫と創意をこらして、あちこちの経営学部でやっているような、学生の問題意識とおよそ噛み合わない経営学の先生の規格にはまった経営学の授業と違ったものを目指してみたいと思うのである。

豊橋創造大学の創造という名前に恥じないような、保守的な学界にこだわらないイノベーションの授業時間でありたいと願う。私の願いだけに終わらせたくない。